

花と緑のある街、 あきる野市

令和5年初夏号 発行者／小山 正弘 編集／あきる野市町内会・自治会連合会 広報部会

まず、体力をつけて!!

あきる野市町内会・自治会連合会

会長 小山 正弘

みなさん、こんにちは。町内会・自治会連合会の小山です。連合会総会も終了し、令和5年度がスタートしました。今年度実行していきたいと思うことは「町内会・自治会そして連合会に体力をつけたい」ということです。

今起こっている様々な課題に耐え、様々な問題乗り越えていく「体力」が欲しい：それには若い世代の多くの方々町内会・自治会に関心を持ち、参加してくれることも重要です。

そこで、連合会のイベント等の企画・運営に若い世代に参画してほしいと思い立ち、若い世代を集めようとしたが、なかなか集まりません。というより、どこに若い世代がいるのかさえわかりません。どこかにいるはずですが、透明人間のようです。

「明星大学があきる野市と提携を結んでいたので当たってみたら」との助言をいただきましたので、藁にもすがる思いで、あきる野市を通して募集してみました。

結果は、残念ながら一人の学生も手を挙げていただけませんでした。難しいことなんですね、新たな試みというのは。

でも、あきらめてませんよ、まだまだ探します。二十歳代・三十歳代・四十歳代の方々、やってみませんか？やってみればきっと楽しいと思いますよ。

自薦・他薦を問いませんので情報がありましたら町内会長・自治会長を通して連合会まで情報をください。

他にも皆さんにお知らせしたいことがあります。それはまたの機会ということに：今年度も町内会・自治会をそして連合会よりしく願います。

こんなことを
やろうとしてます
連合会



令和5年度あきる野市町内会・自治会連合会

定期総会開催される

連合会の定期総会が、4月21日(金)17時～あきる野ルピア・ルピアホールにて開催されました。

定期総会では事業・活動報告、会計決算報告、会計監査報告、連合会規約の一部改正(案)、事業・活動計画(案)、予算(案)が、議論の末、承認され、ご来賓の中嶋市長、村野市会議長、丹治教育長、倉田社会福祉協議会会長、山崎防災・安心地域委員会本部長からご祝辞をいただきました。

連合会の令和5年度の活動がスタートしました。

総会終了後、コロナ下で開催が難しかった、懇親会が開催され、同じ地域の会長が寄り集まって、大いに懇親を深めた後に、秋川駅北口周辺の夜道へと消えて行きました。

災害に学ぶ絆の大切さ

年末の「今年の漢字」に平成21(2011)年は『絆』(きずな)が1位に選ばれた。

3月11日にM9.0の地震による巨大津波や原発事故等、未曾有の被害をもたらした東日本大震災は、尊い命を失うことや連絡が取れず不安な日々を過ごしている報道が家族や友達・恋人・地域の人々との絆の大切さを教えてくれ、私たちは希薄になっている人間関係に改めて気づかされた。また、7月にはFIFA女子ワールドカップで「なでしこジャパン」が優勝した。苦しい状況にあっても自分自身と仲間を信じ、力を合わせて戦う彼女たちの姿に私たちは大きな勇気をもらい、絆の大切さを再認識させてくれた。

令和元年10月の台風19号は、あきる野市にも大きな被害をもたらした。特に上流域に650mm降った雨による秋川の増水で溢水や堤防決壊による浸水、内水による浸水被害に見舞われた。自治会自主防災組織の活動や近隣住民の声掛けにより事前の避難が効果的に行えたので、幸いにも人的被害はなかった。また、事後の近隣住民の助け合いによる泥や畳、家具等の撤去作業を通してさらに絆が強まった。

ただ、自分に被害がなければ胸をなでおろし「対岸の火事」ととらえている住民がいなかったわけではない。人の痛みを受け止める感性と行動する態度を培うことも絆である。

これから梅雨末期の豪雨や台風の被害が心配される季節を迎える。

町内会・自治会として、同じ地区で生活をともしする人々の気心の知れた関係を常日頃から作っておくことは、助け合いや支えあいが発揮できる重要な役割を果たすとともに、生活の迅速な再建に欠かせないものとなる。

『絆』を大切に、安心して暮らせる町内会・自治会にしたいものである。

中村自治会 会長 宮崎 慶一



町内会長 1 年目で感じたこと

羽ケ田町内会 会長 細谷 功

東京都は昨年以前 6 年間で自治会・町内会 144 減少とあります。羽ケ田町内会でも会員数が平成 20 年の最大会員数 272 から今年は 189 に減少、コロナ発症後の 3 年は脱会の数は急増し今後、数年で平成 20 年の半数になると推測しています。

会員減少の要因として、以下の意見は私の個人的見解ですが、行政の市民福祉の向上に伴い、個人が地域の枠に頼らず生活出来るようになったという事ではないかと考えます。したがってあきる野市の市民福祉の向上と町内会員増員の両立には、矛盾を感じ町内活動を進める上で、この事は私の中では大きなジレンマでもあります。

会長になってから町内に属するメリットを問われたことが何度かあります。

結局のところ町内活動は奉仕であり、町内が個人に何か利益を

与えることでは無く、個人が町内に対して何か力を尽くす事によって、その奉仕の結晶が住みよい地域を構築しているわけです。そうした観点から思うに、我が町内では、これからも脱会者は増えるでしょうが、この 1 年の町内事業を通し、組長や各種団体の役員をはじめ多くの方が協力的であることを確認できた事は大きな収穫です。

最後になりますが、地域の枠を広げて考えると、多西地区では子供会が消滅したり、また今後、子供会が無くなりそうな程、子供の数の減少が進んでいる町内もあります。これは地域存続の深刻な課題でもあります。

また、地域防災の要である消防団についても羽ケ田町内会が所属する 5 町内で構成している 3 分団 2 部は、団員数が定員 15 名に対して今年はわずか 6 名で、部の存続も危機的状況にあります。

こうした事から、今までに協力関係にあった地域関係を我々が再認識する事によって問題解決への一助になればいいと感じています。

過疎化で苦慮する自治会運営

軍道自治会 会長 栗原 清治

【あきる野市にも存在する過疎問題】

過疎化とは、ある地域の人口が急激に減少し、その地域の生活機能を維持することが難しくなる状態です。

町内会・自治会連合会は 6 つのブロックから成る集合体で、地域の特性や人口構成が違った町内会・自治会で構成されています。その中の戸倉・小宮支部（戸倉西・戸倉東・青木平・乙津・落合・寺岡・軍道・養沢）は、過疎化の状態が著しい地域です。

軍道自治会では 65 歳以上の住民が人口の半数を占めた地域で、俗に言う限界集落となっていて、自治会運営にも支障をきたす状況です。

解消しないといけな問題山積ですが、第一は人口の減少です。

この地域は、都市計画区域の調整区域内また、土砂災害危険地域や国立公園区域内と法的制限の網が掛かり人口の増加が見込めない地域のためです。

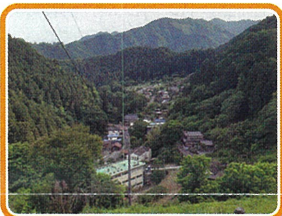
その為、農地の維持や道路の管理、地域の伝統文化の維持継承といった地域としての活動も限界に近い状態にあります。この先自治会が消滅したり、伝統文化が途絶えるといった影響だけではなく、無住となった空き家の問題は、防犯性の低下、景観の悪化、倒壊や火災のリスク、不衛生な環境等の増加などの悪影響も及ぼします。耕作放棄地の増加は、病虫や鳥獣被害の増加、住民が望んでいない開発行為等も行われるかもしれません。

免許返納が推進されるなか、高齢者への生活支援、交通機関等の確保等整備も急がれています。

集落対策の維持活性化推進に関して、地域の実情に詳しく、知見を有した人材と協調し、集落対策ノウハウ・集落の巡回・状況等の把握、きめ細かな集落点検、集落のあり方の話し合い等を市と協働した取り組みをお願いしたいと考えています。

コロナ禍での行動制限が見直された昨今、自治会行事や地域での交流が復活し、街は賑わいが戻る事と思います。

軍道自治会もそうありたいです。



4 年ぶりの納涼大会実施に向けて

中平自治会 会長 安部 光記

新型コロナウイルスの 5 類移行となり自治会の行事、イベントも各地域で復活の傾向が見られるようになってきました。

私も自治会長となり初めての納涼大会を開催する決定をいたしました。役員の時期に経験はしていますが全体を把握しての運営となると違ってきます。

まずは何から始めればよいのやら、過去の実施内容、写真、書類探しからなのですが 3 年近くの空白は思いのほか大きなことになっていました。

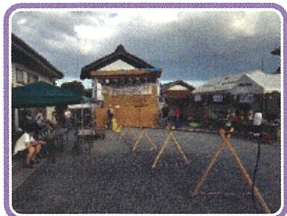
規模は以前の通り出来るか、参加者は集まるだろうか、スタッフは揃うか？

舞台組立をなくしてはと考えました、経験したことがあるので労力と資機材の確認や調達が大変なので。しかし写真を見返すと舞台がないと花がなく寂しいのです。設置することを決め以前は開催当日の組立を一週間前に行うこととしました。

中平自治会の組織には「厚生委員」が 12 名いてイベントの実行係を担ってくれます。しかし全体の運営を考えると足りません。組長さんをお願いして各組からスタッフを出してもらうのですが、組長さんには負担となっているようです。スタッフ募集に力を入れてみようと思います。掲示板や回覧でのお知らせ、いろんな団体へ声かけし参加して楽しんでもらいたい。

予算は以前のようにはいきません、参加希望者を募り世帯内容により大会費を頂き運営費の一部としていますが加入状況も減少しているので期待はできません。市場価格も上がっています模擬店の原材料も工夫が必要です。

検討することはまだまだありますが、企画してる側が楽しんでないと参加者も楽しめないので、実施後に良い報告が出来るよう頑張ります。



編集後記 地域作りの重要性

いま、地域の高齢化率は 3 割を超えようとしています。コロナ禍で行事が中止になると、「集まる機会がなくなつて寂しい」という声が出る一方、「なくなつて良かった」と話す人もいる状況です。行事があると各地区に動員がかり、当日だけでなく準備や練習への参加要請も、負担の大きさから規模縮小など見直しを求める声も出て来ています。

町内会・自治会はいま、多くの課題を抱えています。特に深刻なのが、加入率の低下と担い手不足です。最近では高齢者などの退会も増加。そろそろ役員などの番が回ってくるという時期に退会する例が目立ちます。コロナ禍で活動が停滞し、「入らなくても特に困らない」などの声もあります。担い手の中心は 70 代で、役員の高齢化と固定化が進み、負担の重さが担い手不足を招いています。地域コミュニティの希薄化が進むいま、防災や福祉などの観点で地域のつながりや共助の重要性はより増しています。町内会・自治会がその受け皿になっていないのが実情です。東日本大震災などの災害をみると、住民同士のつながりが強い地域では迅速な安全確認や救助活動などの助け合いが大きな力になりました。日ごろからの互いに頼れる関係の有無が、災害時に共助が機能するかどうかを左右します。地域で取り組むからこそできる課題の解決や魅力づくり、暮らしの安全対策もあります。地域作りのために本当に必要なことはなにか。超高齢化やコロナ禍を経て、町内会・自治会だけでなく、行政や関係機関が一丸となって、会の運営継続や DX 化などのあり方を問い直す時が来ているように感じます。

広報部会 丸山 誠司